

ありのままを受け入れてくれた時代

突然道路に飛び出し、自動車に2回はねられたことがあり、「大丈夫！」と駆け付けた母に「からだと心が痛い」と言ったそうです。先生方の隙を見て、幼稚園の窓から抜け出し、靴も履かずに雨の中約1Kmを歩いて家に帰ったことがあり、「おもしろくないことがあったから」と理由を話したそうです。子ども会で行ったスキー教室、ひとりで滑ることに没頭し、帰りのバスに乗り遅れ、スキー用具一式を引きずりながら雪が降る約7Kmの道のりを家まで歩いて帰り、「練習している姿を人に見られたいなかった」と話したそうです。

ケガやケンカは日常茶飯事、みんなに合わせて行動するのが大の苦手な冒険好き。頑固で人の話を聞かない、落ち着きがなく無鉄砲。大人や先生方にとっては扱いにくい子どもであったようです。

救われたのは、時代がまだおおらかだった昭和40年代だったこと。車の運転手に対し母は咎（とが）めることもなく飛び出した私を叱り、逃げ出した幼稚園はクビにならず卒園でき、子ども会ではその後、リーダーにもなりました。数々の武勇伝（？）を覚えているのは、盆や正月等、家族・親戚が集まった時に、父や母が楽しそうに笑い話として何度も話していたからです。ある意味、適度に「ほったらかし」にされ、自分の好きな道に進ませ、援助を最後まで惜しまなかった両親には感謝しかありません。

そんな私がもし、今の時代に生まれ育っていたらどうだろうか？と思う時があります。確実に大人や先生を困らせる存在であり、場合によっては関係機関への相談や通院を勧められているかもしれません。

やんちゃパワーをそのまま受け入れてくれた両親はじめ、おおらかだった時代、そして、元気なからだに産み育ててくれた亡き母を思いながら、「今、学校という組織の中で、子どものありのままを受け入れるだけの余裕や寛容さが失われていないかな」と自問しています。